

荻原守衛のロダン訪問

武井 敏

はじめに

当館では、これまで、荻原守衛のロダン訪問についての研究成果を『碌山美術館報』に発表してきた。千田敬一「ロダン美術館に残っている荻原守衛関係資料について」¹、五十嵐久雄「荻原守衛のロダン訪問の考察」²である。千田論文は荻原のロダン訪問に関係する資料の発表、五十嵐論文は先行論文に基づく考察である。当館が荻原のロダン訪問を重要な研究課題としているのは、『考える人』に導かれ彫刻を志し、ロダンを師と仰ぎ芸術観を研ぎ澄ませていった荻原に関するファクトを一つでも多く積み上げていきたいと考えているからだ。

しかしながら訪問の詳細については、わからないことが多い。具体的な訪問日が特定できたのは一九〇七年十二月十四日のみであり³、それ以外の日付は特定できていない。また訪問の際のロダンとのやりとりについては、荻原の友人ウォルター・パッチが伝える内容のみである⁴。訪問日、そしてロダンとの面会の具体的内容の双方についての新資料の発見を俟っているものの、長らくそれには至っていない。

ここでは、先行研究を整理し、荻原の訪問日について現段階で間違いなく指摘できることを明確に示すとともに、これまで参照しなかった周辺資料と突き合わせることで、推測しうる訪問日を提示しておきたい。

荻原のロダン訪問の回数

荻原は二度バリーに滞在している。一回目のバリー滞在時は彫刻家への転身を決意する『考える人』との出会いがあったとはいえ、ロダンを訪問することはなかった。荻原がロダンを訪問したのは、二度目のバリー滞在中、すなわちバリーに到着した一九〇六年十月初頭からバリーを後にした一九〇七年十二月十七日の約十四カ月に限定される。加えて、荻原は一九〇七年一月二十二日付の井口喜源治宛書簡のなかで「此頃先生へ紹介状を得候へば 近々訪問 如何に此の偉人が小弟の眼に映ぜるかを御報導致可く候」と記しているため⁵、これ以前の訪問の可能性はないと考えてよい。

したがって、一九〇七年一月二十二日を上限とし、同年十二月十七日を下限とすることができ、なおかつ荻原は一九〇七年初夏から九月二日までの五週間の間ロンドンに滞在しバリーを離れていたため⁶、この間を除外した期間が、ロダン訪問の可能性がある期間に該当する。

まずは荻原自身の資料を振り返っておこう。ただ、荻原が残した資料のなかにロダンについての言及は多くがあるが、彼自身は訪問日について具体的な日付を記したものは皆無であり、訪問に関わる言及も以下の三例を数えるのみである。①一九〇七年四月二十四日付のパッチ宛の書簡の記述「I met him twice in his studio lately (僕は最近彼のスタジオを訪ね、二度会うことができた(強調筆者))」⁷。②斎藤与里とロダン邸でデッサンを見たことの帰国後の述懐「斎 あの時僕は僕も一緒に رفتたね」「荻 さうだ。先生一向無造作なもんだつたね」⁸。(これは①に含まれる可能性もある)。③帰国直前にロダンを訪ね「自然を師と」せよとの饒の言葉を授かったことの帰国後の述懐。(これは、一九〇七年十二月十六日付のロダン宛書簡の最期の面会への感謝をつづる内容から¹⁰、一九〇七年十二月十四日と考えるのが妥当だろう)。これらの資料

から訪問回数は、①の二回と③の一回を合計して、少なくとも三回は面会したとしてよいだろう。

また友人パッチがロダン訪問に同道した際の言及は以下の二つがある。
④「I translated for Mori and Rodin at one of their interviews (私はモリとロダンのために彼らの何度かあった面会のうち一回、通訳をしました)」¹¹、⑤「By later visits with Ogihara (のちに荻原とともにした何度かの訪問)」¹²。④⑤の両者ともに「Interviews」「visits」と複数形が使われていることから、少なくとも二回は面会したと言えるだろう。

パッチのパリ到着は9月半ば以降であるため、①の機会と重複することはない。しかし、③の帰国直前の訪問は、パッチと連名のロダン宛の書簡が残っていることから、二人は同道してロダンを訪問したと考えられる。よって、①から⑤までを勘案すると、面会の回数は少なくとも四回と断定してよいだろう。なお11月初旬に高村光太郎と連れ立ってロダン邸を訪れた際のように、訪問するも面会に至らなかったケースもある。このケースについて、ここでは割愛する。

可能性のある日

これまでの先行研究では荻原側の資料を中心に考察してきた。一九〇七年はロダンも各地を訪問しており、その間はパリを不在にしていたため、荻原は面会することができなかったと考えられる。ロダンは六月二十四日から七月五日頃にかけてオックスフォード、七月五日から七月十五日にかけてブリュッセル、七月十五日から七月三十一日にかけてボアール・ウ(フジエール)、ドンピエール、クタンス、ル・マンなど、各地に滞在していた¹³。そのためこの間、荻原は面会できなかったであろうし、つづいて今度は荻原自身が初夏から九月二日までの五週間の間ロンドンに滞在していた。したがって、六月二十四日から九月二日にか

けての面会はなかったと考えてよい。

数年前、ロダン訪問について調べている際、三谷理華氏から通称「ロダン土曜日 (Les Samedis de Rodin)」と言われるものがあつたとの情報もたらされた。ある曜日を定めてその曜日に来客対応を行う手法は十九世紀の文人や芸術家がよく採っていたものらしいとのことである。ただこの時開放されていたのは rue de l'Université の自身の作品保管所の方で、ムードンの邸宅は私的な住まいという扱いで、ロダン自身の招きがないと訪問が許されなかったそうである。それでも、試しに現在把握している日本人のロダン面会をその曜日と照合してみる。①一九〇七年一月二十七日(日)午後、アサイ、ホサカ、マエジマ、カケシがムードンを訪問、同日、本野一郎がムードンに招かれる。②四月六日(土)本保義太郎がロダンをムードンに訪ね、四月十三日(土)も訪問する約束をする(これはロダンの都合により次週の二十日(土)に変更される)。③十二月十四日(土)四時、荻原守衛がロダンを訪問。少ない事例ではあるが、週末に偏っており、土曜日であることが多い。実現しなかったが、荻原は、二月九日(土)は岡精一とともに、二月十七日(日)は五来欣造とともに、ロダンを訪問する予定をしていた。このように事例を並べてみると、「ロダン土曜日 (Les Samedis de Rodin)」は蓋然性が高いと感じられる。ここで上述①の四月二十四日付書簡の記述「僕は最近彼のスタジオを訪ね、二度会うことができた」を思い返してみると、荻原は本保に同道して四月六日(土)、四月二十日(土)にロダンを訪問したとすれば、確証はないとはいえ、辻褄の合った推測と言えるだろう。

そこで、荻原の一九〇七年の秋以降のロダン面会について、「ロダン土曜日 (Les Samedis de Rodin)」を前提として考えてみる。

10月5日	土	パッチがいれば可能性あり	
10月12日	土	パッチがいれば可能性あり	
10月19日	土	本保義太郎没の翌日のため、可能性は少なさそう。	×
10月26日	土	可能性薄い 五来、与里と昼飯。与里とともにコロ旧宅を訪ねる(斎藤与里日記)	×
11月2日	土		
11月9日	土	高村光太郎と訪問を試みた日とすれば、可能性低い。	×
11月16日	土	前日に先週訪れなかつたお詫びの書簡を送っているため、可能性低い。	×
11月23日	土		
11月30日	土		
12月7日	土	12月5日に最後の訪問を依頼する手紙を出しており、14日がそれに該当するため、可能性は低いか。	×
12月14日	土	4時、ロダンを訪問(12月16日の礼状の該当日だろう)	

すると、パッチとともに面会した可能性のある日として十月五日、十月十二日、十一月二日、十一月二十三日、十一月三十日、の以上五日を数えることができる。ただこれらもまだあくまで可能性のある日付であるため、荻原のロダン面会日を特定するには、まだまだ情報が足りないと言えよう。引き続き、周辺情報に目を配りながら、調査・研究を進めていきたい。

なお、荻原守衛ほか、日本人のロダンとの交流についてまとめたものを遺漏が多いと思うが参考資料として付しておく。

- 1 千田敬一「ロダン美術館に残っている荻原守衛関係資料について」『碌山美術館報』十一号、平成二年、九一―三三頁参照。
- 2 五十嵐久雄「荻原守衛のロダン訪問の考察」『碌山美術館報』三十八号、平成三十年、二二―三四頁参照。
- 3 幅谷啓子「碌山研究 荻原守衛がアカデミー・ジュリアンで制作した彫刻二十五点の検証」『碌山美術館報』二十六号、平成十八年、五八頁参照。
- 4 パッチが戸張孤雁の依頼を受けて荻原との思い出を語った戸張への書簡に記されたロダンとの面会の様子については、荻原守衛『彫刻真髓』精美堂、明治四十四年、二二三頁参照。(邦訳として、笹村草家人訳「荻原守衛に関するワルター・パッチの手紙」『信濃教育』七七三号、昭和二十六年、四七―八頁参照。)、ならびにWalter Pach, *Queer thing, Painting*, New York and London, 1938, pp.81-2 (邦訳として、濱谷一梅監修、望月早智子訳「ウォルター・パッチ著『絵画、この不思議なもの―美術界の四十年』荻原守衛」『碌山美術館報』十五号、平成六年、三三―四頁参照。)
- 5 「荻原守衛書簡集」碌山美術館、二〇一五年、三二―四頁参照。
- 6 九月三日付のパッチ宛書簡に「I went to London to see one of my friend who well understood what is art and what we have got to do, and stay in London for five weeks. (僕は、芸術とは何か、また我々のなさねばならぬことは何かなどをよく理解している友人の一人に会うためロンドンへ行き、五週間滞在した。)」とある。同書、三三―九―四〇頁参照。
- 7 同書、三三四頁参照。
- 8 SG生「休憩室」『荻原守衛日記・論説集』碌山美術館、二〇一八年、四四二頁参照。初出は、SG生「休憩室」『早稲田文学』四四号、明治四十二年、東京書店、四六六頁参照。斎藤のロダン訪問についての記述として、斎藤与里「ロダンに就いて起る感想」『白樺』第一巻第八号、洛陽堂、明治四十三年(復刻版、岩波ブックサービスセンター、一九八八年)、一七頁参照。
- 9 荻原守衛「迷へる青年美術家」『荻原守衛日記・論説集』(前掲書)、四一七頁参照。初出は、荻原守衛「迷へる青年美術家」『新小説』第十四年第六巻、明治四十二年、春陽堂、二二二頁。
- 10 「荻原守衛書簡集」(前掲書)、三四九頁参照。
- 11 『彫刻真髓』(前掲書)、二二三頁参照。
- 12 Walter Pach, *op. cit.*, p.81.
- 13 Musée Rodin (ed.), *Chronologie, Correspondance de Rodin II 1900-1907*, 1986, p.19.

西暦	明治	月日	曜日	
1890-92頃	23-25頃			開倉天心、東京美術学校の「泰西美術史」講義のなかでロダタンにふれる。「早起り派にロダタンと云へる人あり、此の人は極めて必要の処に力を用ゆれば、他は如何にあるとも宜しとの考へを持ち居るなり。故に人が怒つて他の者を打たんとするの因なり、衆に目及び振り上げたる手に力を用ゐ、他の着衣の如きは老も意を用ゐざるが如きなり。今日の着衣の如きは老も意を用ゐる最中なり。古来東洋より西洋に影響を及ぼしたるは亜拉比亜、印度、波斯、支那等なれども、近頃日本のものに影響する最も多し。仏蘭西、英吉利は其の最たるものなり。私人ミレー、コロドーの如きは写生より写意を主唱す。実物より面白味を添ゆべしとなり。インフレツシヨネツス派の如きは、一見即ち真にして是なりとす。誰も空も意見したる儘にて画くべし。細波片雲を画くを要せずと。之れ美術院の風と異なる処なり。前述のルーダタンの如きも亦然り。」
1903?	36?	?		伊藤栄と会う

1904	37	5月		萩原守衛、サロン・ド・ラ・ソシエテ・オシヨナル・デ・ボザール（会期：4月17日-6月30日）の会場グラン・パレに展示されていたロダタンの《考える人》（拡大版）を見て深く感動、彫刻家になる決心をさせる。
------	----	----	--	--

1904	37	5月8日	日	萩原守衛、パリを発ち帰米の途につく。
1904	37	10月3日	月	沼田一雅がロダタン短に10月6日（木）の午前中に中村、岡と三人で訪問したい旨の手紙を出す。

1904	37	10月6日?	木	中村不折、沼田一雅、岡精一がパリ郊外ムーアードンのロダタンを訪問した？ （中村不折「ロダタン先生を語る」では11日） （岡原二郎「ロダタンの目」石井から沼田一雅のロダタン訪問時の話を聞いた。ロダタンに日本の私像の写真を見せると、夢殿の腹背をよしとし、鎌倉時代の四天王の一つはよくないとしたのをエピソードの該当日?）
1905	38	秋		沼田一雅がロダタンに弟子入りする

1905	38	秋		武石私三郎がムーアードンのロダタンを訪ねる 「一九〇五年頃と思ひますが、私はアラスカセルからパリへ旅行いたしました。その目的の第一は、何と云つてもロダタン先生にあふことでした。幸に私の先生アラーブンはロダタンを識つてゐるからと云つて、わざわざ紹介状を書いてくれました。ロダタンはベルギーに來たことがあり、その時の知りあひだったのですが、その紹介状を持ってムーアードンのロダタン館を訪ねると、玄関まで出て來たロダタンは、いきなりラテン・チル・スチューンといふ彫刻家は知らぬと云ふのです。これには先づ、私の顔を見て、お前は日本人だね、それちや上れと云ふのです。日本人であつたがために、私はロダタン先生に懐かしく接することが出来たわけ。」
------	----	---	--	---

1906	39	7月15日-21日の間		ロダタン、マールセイエで花子に会う
1906	39	9月27日	木	萩原守衛、アカデミー・ジュリアンで彫刻部の学費（一日分の授業料と彫刻台の使用料+一年分40フラン）の納入
1906	39	10月朔?		萩原守衛、パリ着。

典拠（発表誌など）

（開倉天心「泰西美術史」『開倉天心全集』4巻、平凡社、1980年、255頁）

（中村不折「ロダタン先生を訪ふ」『画界漫語』服部書店、明治39年、299頁。）

萩原守衛「オブリヴェキオン展」『教育時論』明治41年、開発社、19頁。
（萩原守衛日記、論叢集）2018年、385-36頁。）

中村不折のガイドブックへの書き込み
（体裁「資料研究 一九〇四年・ロダタン-中村不折田蔵資料をめぐる一」『塚山美術館報』15号、平成6年、5-10頁。）

沼田一雅の手紙（ロダタン美術館蔵）
（塚山美術館報』13号、平成4年、47-8頁。）

沼田一雅の手紙（ロダタン美術館蔵）
（塚山美術館報』13号、平成4年、47-8頁。）

（「ロダタンと日本」〔図録〕、2001年、317頁。）

（武石私三郎「三度颯外像を彫刻して」『文学散歩』15号、1962年、文学散歩長の会事務局、88頁。）

（「ロダタンと日本」〔図録〕、2001年、40頁。）

ジュリアン学術簿（『塚山美術館報』11号、平成2年、22頁。）

井口喜源治短書簡（no.102）（塚山美術館蔵）
萩原守衛短書簡（no.103）（塚山美術館蔵）
（書簡ナンバーは「萩原守衛書簡集」のもの、以下同様）

年月	日	曜日	内容	備考	
1906	39	12月31日	月	萩原守衛から井口嘉源治宛書簡 (no.104) 「近世美術のロダンがミケランジェロより大衆と思ふです。氏は仏國アアカデミーの方からは嘗て非常に反対されて今でも学士会員にはまだ成られぬと思ひますが、御物真から反対せらるゝ、それだけ一段も飛びはなれて大いい様です。其の洗練のヨハネの如き実に崇敬の感を生かざるは恐ろしい様です。(中略) 近々の申居をムードソンの閑居に訪ふべければ説は聞くを得ずとも製作の全部を見る事を得べければ又々申上申す」	井口嘉源治宛書簡 (no.104) (碌山美術館蔵)
1907	40	1月16日	水	ポール＝ルイ・クジエーの1月16日付の紹介状 「親愛なる先生、お会いして、お話をうかがひたいと熱望している日本人の彫刻家、萩原氏と通訳をしてくれる東洋語学校の助教、五来氏をどうぞおたたくか、お慰めくださいませようお願いします。敬具 (尊敬と賞美の念の表明をどうぞお受入ください)」 ポール＝ルイ・クジエー」	ポール＝ルイ・クジエーの紹介状 (碌山美術館蔵) 〔碌山美術館報〕11号、平成2年、9頁。〕
1907	40	1月22日	火	萩原守衛から井口宛書簡 (no.105) 「總じて仏國の美術は拙に長けたるもの、横に饒、元よりミレー、フッソ、ロダン等二、三の例外は有之可く候へ共大體彼等は偉大の思想を解し得る國民ならざる如く拜見候。殊に最近のものに至つては輕浮淺劣の作多ク候中に獨りロダンが偉大の製作を産出して吾人の意を強ふするもの、彼は文字列に於けるエーゴの如く群をぬく事々々に候。唯エーゴも亦なりつゝあるパンテネンの門前にすへられ彼ロダンの「ラ・パンサー」(「考思の人」)の如きは全身之れ懸全體之れ魂とでも申すべし、これは先生が二十年の久しきにわたりてまだ成就せざるガソンの加曲中「描録の門」なる大製作の加曲に掛かるべきもの、由にて彼が一代の傑作なるやも不知れず候。此頃先生へ紹介状を得候へば近々訪問 如何に此の偉人が兄弟の眼に映せるかを御報薄致可く候」(→ これ以前のロダン面会はない)	井口嘉源治宛書簡 (no.105) (碌山美術館蔵)
1907	40	1月22日	火	本野久、ロダン宛書簡 「拜啓、先日貴方にお話ししました、若い日本の芸術家である私の友人たちに、貴方のアトリエを見せていただけば大変わうれしく存じます。私自身がご紹介に同道できないものから、貴方のご希望の折に彼らか私の名刺をもつてお訪ねいたします。 お返事、お待ちしております。敬具 本野久」(三谷氏訳)	本野久、ロダン宛の書簡 (ロダン美術館蔵)
1907	40	1月25日	金	本野久、ロダン宛書簡 「拜啓、私のお願いをお聞き届けいただき、貴方のアトリエで友人にご面会いただくことになり、誠にありがとうございます。彼らは日曜日の午後ムードソンのうちかあせいでいただきます。一行は4人です。オヤブ・豊波の細工師であるアソノ氏の彫刻家です。これら3人の若者は東京美術学校で生徒です。彼らにはたいまがオヤブと通りのカイヤール氏の赤にいます。彼らが貴方の関心を引けばよいです。お尋ねください。日本美術についてお尋ねください。私へのご親切に改めて感謝申し上げます。敬具 本野久」(三谷氏訳)	本野久、ロダン宛書簡 (ロダン美術館蔵)
1907	40	1月27日	日	午後、アサキ、ホサカ、マエジマ、カケシ、ムードソンの訪問	本野久、ロダン宛書簡 (ロダン美術館蔵) 1月25日の書簡から
1907	40	1月31日	木	本野、一朗がムードソンの招かれる。	〔ロダンと日本〕(図録、2001年、318頁。)
1907	40	2月9日	土	「萩原氏は圓君と、ロダン、を訪問と云つて居つた」 (面会はおそらくしていない → 4/24のパンチ宛書簡の内容から)	〔碌山美術館報〕11号、平成2年、12頁。〕 〔碌山美術館報〕27号、平成19年、50頁。〕
1907	40	2月17日	日	「今日は彫刻の大衆ロダンを訪ねるで萩原君と五来で朝の十時迄に萩原の家に来る約束であった。昨日萩原と別れる時に「荒し十時半頃に萩原の家に行かなくてはならぬ、明日は行かれないのと思つて具ね給ひ」と云つたから今日其時刻迄待つて居つた。彼が来るもんだから、何か用事が出来て行かれないのと見える。オヤブ一人の方から訪ねて今日は一人で出掛きました」と云ふので、そりや十一時の車で出掛した。アトリエの萩原君の家を訪ねて見ると「今朝巴里へ二(面会はおそらくしていない → 4/24のパンチ宛書簡の内容から) (1/16の紹介状と関係するか?)」	斎藤吉里の日記「草笛」(加須市蔵) 〔碌山美術館報〕27号、平成19年、53頁。〕
1907	40	3月1～4日		ロダン、ストラスブルへ (→ この間の面会はない)	Musée Rodin (ed.) Chronologie. <i>Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> , 1986, p.19.
1907	40	3月22～24日		ロダン、リヨンへ (→ この間の面会はない)	Musée Rodin (ed.) Chronologie. <i>Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> , 1986, p.19.
1907	40	4月2日	火	本保義太郎、サロン・デ・ボザール入選の通知をサロンの影響部長ロダンから受け取る。	〔高志の葉〕35号、昭和15〕

1907	40	4月3日	水	日本大使館からの本保義太郎を紹介するロタン宛の紹介状	日本大使館からの本保の紹介状(ロタン美術館蔵) 〔碌山美術館報〕11号、平成2年、13頁。
1907	40	4月6日	土	本保義太郎がロタンをムーブメントに訪ねる。 4月13日も訪問する約束をする。	本保の礼状(4/11)(ロタン美術館蔵)〔高志の巻〕42号、昭和57年 本保の実家への手紙(河越先?)〔碌山美術館報〕11号、平成2年、12頁。
1907	40	4月7日	日	萩原守衛、10時半フランスサンジールで母里と会い、教会へ。12時15分教会を出る。美術館、公園へ。子どものテニスを一時間見る。面白いので毎日顔見ようとの約束をする。	斎藤与里の日記「草笥」(加須市蔵) 〔碌山美術館報〕28号、平成20年、54頁。
1907	40	4月11日	木	ロタン宛の本保義太郎の礼状	ロタン宛の本保義太郎の礼状(ロタン美術館蔵) 〔碌山美術館報〕11号、平成2年、12頁。
1907	40	4月12日	金	ロタンの祝書?から本保義太郎への翌日の面会を要請へ返す旨の伝言	ロタンの名刺に書かれた本保義太郎宛伝言 〔碌山美術館報〕11号、平成2年、13頁。〔高志の巻〕36号、昭和55年
1907	40	4月13日	土	ロタンはサロンの用事 → 本保義太郎の面会の延期(→ 萩原もってないはず)	ロタンの名刺に書かれた本保義太郎宛伝言 〔碌山美術館報〕11号、平成2年、13頁。〔高志の巻〕36号、昭和55年
1907	40	4月14日	日	サロン開催(→6月30日)	
1907	40	4月19日	金	『狂飲は例の飯屋也。(中略)会するのは五来素川子 出口 本保 斎藤にて 出口のオウヤンバリに腹を痛くす』 (→ 翌日、本保義太郎がロタン訪問する話題が出たのでは?)	萩原守衛「イタリヤ・エジプト日記」 〔萩原守衛日記・論叢集〕2018年、305頁。
1907	40	4月20日	土	本保義太郎がロタンを訪ねている可能性高い(→守衛、同道か?)	ロタンの名刺に書かれた本保義太郎宛伝言 〔碌山美術館報〕11号、平成2年、13頁。〔高志の巻〕36号、昭和55年
1907	40	4月24日	水	夜、萩原守衛、パッチ宛書簡 (no.106)を認める。 "In sculpture Rodin is only one, the other are almost very bad, he has "man in walk" and is great I met him twice in his studio lately oh, nice gentleman he is, he is only sculptor of this time I think" (彫刻では、ロタンだけが残った)と突出して、あとは皆目撃目だ。ロタンは「歩く人」を出品していた、これが素晴らしいかった。彼は最近彼のアトリエを訪ね、二度会うことができたんだ。ああ、素晴らしい紳士だった。彼こそが今日存在しようなのだびとりの彫刻家だと僕は思う。)	パッチ宛書簡 (no.106) (スミソニア博物館蔵) 〔碌山美術館報〕23号、平成15年、6頁。
1907	40	5月11日	土	萩原守衛、鹿子木五郎と斎藤与里を訪ね半日遊ぶ (→ ロタン面会はないはず)	斎藤与里の日記「草笥」(加須市蔵) 〔碌山美術館報〕28号、平成20年、55頁。
1907	40	5月25日	土	セーブルの五来弥彦を訪ねる。 (→ ロタン面会はないはず)	井口寛源治宛書簡 (no.107)
1907	40	5月26日	日	汽車に乗り遅れ教会へ行けど、終日五来と過ごし、ロタンの家の迎いを通りながら帰宅 (→ ロタン面会はないはず)	井口寛源治宛書簡 (no.107)
1907	40	5月28日	火	萩原守衛、井口寛源治宛書簡 (no.107)を認める。 「此の上端にはセーブルの五来兄を訪ね(彼は同様に旅せり)、他の二友と四人して親月会を催し、カルタなど遊びました。日曜は巴里の英国の教会へ参るのが後残れて(午前)に、終一日を同向と遊の暮らし、御祭りに参り風船を見など致しました。セーブルに船を浮べんとして、かす舟のなみのに驚き、船の運道にロタンの家の辺に出で此夜後の美登里庵に帰りました。」	井口寛源治宛書簡 (no.107)
1907	40	6月8日	土	津田清風、安井曾太郎、バリ到着	(鹿山秀男編「年譜」『生涯百年記念安井曾太郎展』(図録)、毎日新聞社、1989年。)
1907	40	6月24日 ～7月5日頃		ロタン、オックスフォードへ	Musée Rodin (ed.) Chronologie. <i>Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> . 1986, p.19.
1907	40	7月5日 ～7月15日		ロタン、ブリュッセルへ	Musée Rodin (ed.) Chronologie. <i>Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> . 1986, p.19.
1907	40	7月15日 ～7月31日		ロタン、ボア・ル・ウ(ワジエール)、ドンビエール、クアンヌ、ル・マンなどへ	Musée Rodin (ed.) Chronologie. <i>Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> . 1986, p.19.
1907	40	7月末～8月末		萩原守衛、7月末から8月末迄約5週間、キリス滞在。 (7月29日(月)には少なくともロタン滞在) (→ ロタン面会はないはず)	萩原守衛、白瀬幾之助宛、ロンドン発信8月2日(金)付書簡(個人蔵) 〔碌山美術館報〕37号、平成29年、4頁。 萩原守衛、森屋十重十宛、サイトリウ発信9月1日(日)付書簡 (no.109)〔碌山美術館蔵〕

1907	40	9月初 ～9月21日		ロダンの「ポワール・ウー (→ 以上から、ロダンは6月24日から9月21日までパリを離れており、この期間の面会はないと考えられる。)	Musée Rodin (ed.) <i>Chronologie, Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> , 1986, p.19.
1907	40		パッサン、パリに来る、9月半は以降 パッサンのパリ到着以降12月17日まで、 "translated for Mori and Rodin at one of their interviews" (彰知真髓 223頁) → 複数回 "by later visits with Ogihara (<i>Queer thing, Painting</i> , p. 81) → 複数回	この時点で、16 rue du Theatre に津田青風、安井曾太郎、白滝義之助が住んでいる。 (白滝義之助「高日誰からか紹介状を貰ってロダン先生を郊外の居宅に訪問することになった。吾々二人は追従した。(中略) 生誕当日は先生のバリのアトリエに行つて居られた」東京藝術大学石井教授研究室編「彫刻家萩原嶽山」信濃教育会、昭和29年、135頁。) (白滝は8月14日にはパリにいる→五来春樹「嶽山美術館報」14号、平成5年、74頁。)	鹿子木孟郎書翰 (山梨絵美子「研究資料 鹿子木孟郎書翰(三)」『美術研究』346号、平成2、217頁。)
1907	40	10月7日	月		
1907	40	10月10日?	?	ロダンの素描展@ベルヘム＝ジュース画廊(会期：おそらく10月10日～30日)	Musée Rodin (ed.) <i>Chronologie, Correspondance de Rodin II 1900-1907</i> , 1986, p.19.
1907	40	10月18日	金	本保養大抵没	(「高志の葉」36号、昭和55)
1907	40	10月22日	火	本保養大抵の開催(午前)に rue de la Santé (ロシヤン病院) から出てベル・ラシェーヌ墓地に行く)	鹿子木孟郎書翰 (山梨絵美子「研究資料 鹿子木孟郎書翰(三)」『美術研究』346号、平成2、219頁。)
1907	40	10月26日	土	(荻原守衛、五来秋造、斎藤守里と昼飯。斎藤守里とともにコーロ一日宅を訪ねる)	斎藤守里の日記「草笛」(加須市蔵) (嶽山美術館報] 28号、平成20年、55頁。)
1907	40	10月30日	水	ロダンの素描展 (@ベルヘム＝ジュース画廊) 最終日	
1907	40	素描展の 2、3日後	?	11月1日(金)、2日(土)、3日(日)か? 斎藤守里、ロダンを訪ねるか不在 (日時と典拠文中の「我」]「五六十枚集めて、ツイ二三日前迄巴里で、展覧会に供した」]から推定) (発原＝白滝義之助、南北子＝不明)	斎藤守里「ロダンに就いて起る感想」『白樺』第一号第八巻、明治43年、17頁。
1907	40	11月3日	日	「明治四十一年秋天長節を禿堂、南北子と巴里に迎ふ 嶽山」 (発原＝白滝義之助、南北子＝不明)	荻原守衛スケッチブックIの書き込み (荻原守衛日記・論叢集] 2018年、285頁。)
1907	40	11月初旬	?	荻原守衛、高村光太郎とともに、ロダンのアトリエ(おそらくムードン)へ行きコースと会うが、 ロダンのアトリエ(ユニヴェルシテ)に立ち寄れずロダンには会えなかった。	ロダン宛書翰 (no.115)「ロダン美術館蔵」より推定 (嶽山美術館報] 11号、平成2年、14頁。)
1907	40	11月13日	水	高村光太郎手紙「先週巴理へ一寸参りセザンヌの妙味をはじめ知り申候。」 →「附料のバリ」請問はこれ以前	高村光太郎手紙「ロンドン発信」 (高村光太郎「いのちと愛の軌跡」(図録)、山梨県立文学館、2007年、21頁。)
1907	40	11月15日	金	荻原守衛からロダン宛書翰 (no. 115) →週間開ユニヴェルシテのアトリエを訪ねなかったことをわびる。(高村光太郎の電車の時間の関係で)	ロダン宛書翰 (no.115)「ロダン美術館蔵」 (嶽山美術館報] 11号、平成2年、14頁。)
1907	40	12月5日	木	荻原守衛からロダン宛書翰 (no. 116) ロダンのハガキへの御礼を述べる。訪問の希望を伝える。	ロダン宛書翰 (no.116)「ロダン美術館蔵」 (嶽山美術館報] 11号、平成2年、17頁。)
1907	40	12月14日	土	4時、荻原守衛、ロダンを訪問(12月16日の礼状の発日か?)	秘書の手定表(ロダン美術館蔵) (嶽山美術館報] 26号、平成18年、58頁。)
1907	40	12月16日	月	荻原守衛、ウエルター・パッサンからロダン宛書翰 (no. 118) ムードンへの訪問の御礼と贈呈した鈴木春信の浮世絵の説明。	ロダン宛書翰 (no.118)「ロダン美術館蔵」 (嶽山美術館報] 11号、平成2年、18頁。)
1907	40	12月17日	火	荻原守衛、帰国のためパリを発つ。	(生誕150年ロダン展」(図録)平成2年、145頁。)
1908	41	6月6日	土	「明天 午後二時 Rodin を見ル Bernadette 共なり」	「伊大和の旅」『現代』現代社、明治42年、111頁。 (荻原守衛日記・論叢集] 2018年、444頁。)

1908頃	41	?	ある日曜、有馬生馬、山下新太郎と光太郎がムードンにロタンを訪ねるか?不在 (光太郎のバリエーションは6月11日、バリエーションは翌年5月)	高村光太郎「ロタンの手記談話録」『高村光太郎全集』第七巻、筑摩書房、1957年、139頁。 高村光太郎「運慶の日」『高村光太郎全集』第十巻、筑摩書房、1958年、143頁。
-------	----	---	--	---

1910	43	4月22日	金	萩原守衛発	
1910	43	9月1日	木	有馬生馬、ロタンへ手紙を出す(特集を組むので、正確な誕生日を覚えて欲しい、できれば肖像写真とメッセージも)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1910	43	10月12日	水	有馬、ロタンの書簡受理(誕生日の回答、テッサンと浮世絵の交換を提案)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1910	43	10月30日	日	有馬からロタン宛の書簡(写真と手紙の郵札、浮世絵は後日発送)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1910	43	11月14日	月	〔白樺〕11月号(ロタン号)発行(ロタンから誕生日は14日と返事か来たため)	

1911	44	4月20日	木	萩原守衛の遺稿集『彫刻真髓』発行	
1911	44	5月28日	日	ハッチからロタン宛書簡(萩原の遺稿集『彫刻真髓』を献呈したい)	ハッチ書簡(ロタン美術館蔵) 〔塚山美術館報〕11号、平成2年、19頁。 (生涯150年ロタン展)(図録、平成2年、145-46頁)
1911	44	6月1日	木	ロタンからハッチ宛書簡(申し出への返答、今週金曜もしくは土曜の五時半にお越しください)	ロタン書簡(スミリアン博物館蔵) 〔塚山美術館報〕23号、平成15年、16頁。
1911	44	6月2日	金	ハッチからロタン宛書簡(手紙の郵札と明日土曜5時半に向う)	ハッチ書簡(ロタン美術館蔵) 〔塚山美術館報〕11号、平成2年、20頁。 (生涯150年ロタン展)(図録、平成2年、146頁)
1911	44	6月3日	土	ハッチ、藤川勇造と共にロタン訪問	ハッチ書簡(ロタン美術館蔵)(6月2日付より推定)
1911	44	7月付		白樺同人がロタンに浮世絵30枚を贈る	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1911	44	8月18日	土	ロタンから有馬宛書簡(浮世絵の返礼、3点のフロンズ贈呈の申し出、日本でのテッサン展の提案) (テッサン展の話はその後白樺の手を離れ国家規模のプロジェクトになるが、結局頓挫)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁) (全文訳は高村光太郎『雑ログタンの言葉』叢文閣、大正9年、176-8頁。)
1911	44	9月17日	日	ロタンから有馬宛書簡(フロンズを飲み込んだ船は12月頃到着予定)	〔ロタンと日本〕(図録、2001年、157頁。)
1911	44	10月25日	水	有馬からロタン宛書簡(フロンズ贈呈の申し出への謝意、テッサン展の準備照会)	(全文訳は高村光太郎『雑ログタンの言葉』叢文閣、大正9年、178-9頁。)
1911	44	11月17日	金	ロタンから有馬宛書簡(テッサン展の詳細提案)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1911	44	12月22日	金	3点のフロンズ(小さき彫『マダム・ロタン』『ゴッホの首』)の受理	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)

1912	45	1月付		有馬からロタン宛書簡(フロンズの郵札)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1912	45	2月16-25日		〔白樺主催第四次美術展覧会〕開催(赤坂・三倉堂、ロタンの3点を出品)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁および186頁)
1912	45	5月3日	金	有馬からロタン宛書簡(与謝野夫妻の紹介状)	〔白樺派の愛した美術〕(図録、平成21年、31頁)
1912	45	6月18日	火	与謝野敦敏、晶子、ロタンを訪ねる。通訳は松岡曜村。 7月を以て紹介状は有馬。ムードンを訪ねない、ピロン館で面会。	与謝野『東京朝日新聞』7/14、15、16、17 松岡は『大阪朝日新聞』7/16、17
1912	大元	11月19日	火	安達峰一郎からロタンへ 経済事情のためすくには日本でロタン展はできないと聞いている。藤川勇造の後ろ盾の依頼	〔塚山美術館報〕12号、平成3年、35頁。

1913	大2	3月20日	木	安達峰一郎からロタンへ 藤川はバリエーションのように修行を積んでいますか?	〔塚山美術館報〕12号、平成3年、35頁。
------	----	-------	---	--	-----------------------

1913	大2	6月19日	木	国民美術協会からロダンをへ 14年4月1日より展覧会を開催したく、作品の発送を依頼	(「碌山美術館報」12号、平成3年、35頁。)
1914	大3	9月2日	水	藤山勇造からロダンをへ 職柄を逃れイギリスへ移ること、イギリスで仕事をさせてくれる彫刻家の紹介を依頼	(「碌山美術館報」12号、平成3年、35頁。) (「生涯150年ロダンの展」(図録)、平成2年、147頁。)
1914	大3	10月10日	土	藤山勇造からロダンをへ 昨晩手紙を受け取り、本日午後トウマー氏を訪ねるも留守	(「碌山美術館報」12号、平成3年、36頁。) (「生涯150年ロダンの展」(図録)平成2年、147-8頁。)
1914	大3	不明		「千九百十四年の或日日本の学生がロダンを市中の工房に訪うた。ロダンは直ちに引接して、「今日は何を持ってきた」といきなりきいた。学生は赤くなつて「今日は何も持ってきて来ませんでした。」と答へた。するとロダンは顔を曇らして、「仕事を見せに来たのでなければよく帰へりなさい」と言つたさうだ」	(山本鼎「ロダンの事」『美術家の欠伸、ワルズ、1921年、204頁。)
1914	大3	冬		ロンドンにて、ロダンのイタリヤ旅行の二日前「私は千九百十四年の冬倫敦でロダンの翁にお目に懸つた。」(206頁) 「当時英國に留学中の徳川頼貞氏が、ロダンの翁に逢ひ度いといふ事で、藤川(勇造)が翁に其由を通じ翁が承諾されて、徳川、都(忠彦)、藤川、山本の四人で訪問する事になつた。」(207頁) (徳川が尋問に運れたため、山本と都が尋問し、その後頼貞と藤川が訪問) (ロダンは日本でのデッサン展が喧嘩に乗り上げていることに苦言を呈す。)	(山本鼎「ロダンの追憶」『美術家の欠伸、ワルズ、1921年、206-213頁。)

謝辞 本稿をなすにあたり、瀬尾千秋氏、塚田瑞穂氏、三谷理華氏、山本成子氏から資料の提供、ご教示を賜りました。記して感謝いたします。